

## 韓国『東アジア史』における近代史の内容分析

### —日本に関する叙述を中心に—

國分麻里\*

#### 1. はじめに

韓国で「東アジア史」という科目が出現したのは、2007年の教育課程からである。この背景には、①日本と中国による「歴史歪曲」に対する対応、②自国史教育の相対化、③民間の歴史交流の影響などがある。こうした「東アジア史」新設の経緯、科目の目的および構成などについては、すでに権<sup>1)</sup>や國分<sup>2)</sup>が明らかにしている。これ以外にも、歴史学の立場から、2007年に出された教育課程とその後の教科書モデル案を分析したものもある<sup>3)</sup>。また、韓国においても、韓国史教科書の東アジア史に関する叙述を分析し、『東アジア史』<sup>4)</sup>との関係を論じた研究がある<sup>5)</sup>。

2007年教育課程での科目新設から韓国では政権が代わり、2009年に新しい教育課程が出されるに至っては、「東アジア史」実施の有無が取りざたされた時期もあった<sup>6)</sup>。しかし、実施を後押しする東北亜歴史財団主催の教員研修<sup>7)</sup>も行われ、2012年3月より教科書を用いた「東アジア史」の授業が開始されている。本稿の目的は『東アジア史』の教科書として出版された2社の近代の叙述構成を比較し、日本関連の叙述を検討するものである。ここで『東アジア史』の近代の日本関連叙述に注目するのは、次の2点の理由からである。1点目は、朝鮮半島の歴史において近代史は日本による侵略および36年間にわたる植民地支配を受けた期間であり、日本の侵略や加害に関する叙述が多くを占めるからである<sup>8)</sup>。2点目は、1点目とも関連するのであるが、近代史における日本人の姿は、現在の韓国人の日本観に大きく関わる部分だからである<sup>9)</sup>。

本稿の構成は次の通りである。以下、第2節では『東アジア史』の2冊の教科書の比較を行

ない、近代史における日本関連の叙述内容を明らかにする。次の第3節では特徴的な中単元の叙述を具体的に取り上げて分析する。なお、本稿で韓国とする場合は一部を除いて現在の大韓民国を示すものとし、近代および1947年以前の叙述にあつては、当時用いられた朝鮮という言葉を用いる。その範囲は朝鮮半島全体である。

#### 2. 『東アジア史』の教科書比較

「東アジア史」の地理的な範囲は、中国、朝鮮半島、日本、ベトナムである。教育課程における科目の目的は、「東アジア地域において展開された人間の活動とそれが残した遺産を歴史的に把握して、この地域に対する理解を増進し、ひいては地域の共同の発展と平和を追求する見識と姿勢を育てる」<sup>10)</sup>である。この内容をより具体化したものとして、天才教育版『東アジア史』「はじめに」では、次のように説明されている<sup>11)</sup>。「東アジア史」の目的は、現在の視点から過去の歴史を再構成し、未来の方向性を展望することである。そのため前近代では「漢字」・「仏教」・「儒学」という共通点、生活様式の相違点という両面をとらえること、近現代の叙述では「共通の経験」が重視される。こうした「東アジア史」を学ぶことで、従来の民族や国家史を基軸とした歴史叙述を超え、「東アジアという地域世界」の中で自国史を客観的に見ることができ、隣国理解も深まるとされている。

##### (1) 執筆陣の比較

前述した通り『東アジア史』は、2012年3月現在で2つの出版社より発行されている。天才教育版と教学社版であり、どちらも教科書の名

\*筑波大学

前は『東アジア史』である<sup>12)</sup>。天才教育版と教学社版の教科書の比較においてまず目に付くのは、その執筆陣である。両教科書の執筆陣の比較については、以下の通りである。

は、その執筆陣である。両教科書の執筆陣の比較については、以下の通りである。

表1：『東アジア史』の執筆陣比較

		天才教育版 (9名)	教学社版 (8名)
執筆陣	専門分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>・韓国史学 2名</li> <li>韓国中世史／韓国近代史</li> <li>・東洋史学 4名</li> <li>中国近代史／中国中世史／日本史 (2名)</li> <li>・高校教師 3名</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・韓国史学 5名</li> <li>韓国古代史／韓国中世史 (3名)／韓国近代史</li> <li>・東洋史学 1名 (日本史)</li> <li>・高校教師 2名</li> </ul>
	経歴・特色	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本史専攻の研究者は、シカゴ大学で博士学位取得。</li> <li>・高校教師の一人は日本留学経験あり。</li> <li>・高校教師の一人は、東アジア史の教育で修士学位取得。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日韓歴史共同研究委員会の委員が4名。</li> <li>・研究者の一人は、日韓関係史学会会長・日韓歴史共同研究委員会総幹事・東北アジア歴史財団編集委員。</li> <li>・研究者の一人は、日中韓共同歴史教材開発委員会委員長。</li> <li>・研究者の一人は、日本史学会の理事。</li> <li>・高校教師の一人は、日本留学の経験があり、日韓歴史教師交流研究会の会員。</li> </ul>

※執筆者一覧を基に筆者が作成した。

専門分野であるが、天才教育版が韓国史・中国史・日本史と分野が分かれて配置されているのに対して、教学社版は韓国史が5名(国史編集委員会編修研究官も含む)、東洋史1名とほぼ韓国史の専門家が中心となっている。この教学社版の研究者は、日本と韓国の政府間で行われた日韓歴史共同研究委員会の委員が8名中4名を占める。また、高校教師の数は3名対2名とあまり変化はないものの、天才教育版は3名のうち1名、教学社版も1名が日本で学んだ経験がある。このように、天才教育版が韓国史・中

国史・日本史とまんべんなく研究者が配置されており専門分野に偏りがなく、韓国史の比重が相対的に低い。これに対して、教学社版は韓国史を専門とするものが多いということ、日韓歴史共同研究委員会委員の比重が高いことを特色として挙げることができる<sup>13)</sup>。

(2) 近代の比較および叙述分析

両教科書の目次を教育課程の内容構成と比較すると、以下の通りである。

表2：近代に関する内容比較

教育課程	天才教育版	教学社版
V 国民国家の模索	V 国民国家の樹立	V 国民国家の模索
1. 開港と国民国家の樹立	1. 開港と国民国家樹立の努力	1. 開港と国民国家
2. 帝国主義の侵略	2. 帝国主義侵略と被害	2. 侵略戦争の拡大と民衆の被害
3. 民族主義と民族運動	3. 民族主義と民族運動	3. 反侵略抵抗運動
4. 平和へ向かう努力	4. 平和へ向かう努力	4. 西欧文物の受容と社会変化
5. 西欧文物の受容と社会変化	5. 西欧文物の受容と社会変化	

※下線強調は筆者による。

表2を見ると、両教科書がほぼ教育課程の内容構成に従って目次を構成していることがわかる。ただ、天才教育版は5つの中単元、教学社版は4つの中単元である。これは、教育課程の下線を引いた中単元「3. 民族主義と民族運動」「4. 平和へ向かう努力」の2つを、教学社版教

科書は「3. 反侵略抵抗運動」にまとめて構成しているからである。近代の内容について、天才教育版の本文の目次項目を例にして順に列記すると、構成は以下の①～⑤となる。語尾の【 】は内容により筆者が分類をした。

- ①西洋勢力と開港, 近代的改革, 国民国家の樹立と挫折【政治史】
- ②帝国主義侵略と戦争の展開, 日本の侵略(半島・アジア), 侵略戦争の被害【政治史】
- ③19世紀後半の民族運動・思想の拡散, 帝国主義の侵略と民族運動【思想・政治史】
- ④反戦・反帝思想の形成, 抗日のための国際連帯(中韓/日韓/日中)【政治史】
- ⑤社会進化論, 新聞と近代学校, 太陽暦採択と鉄道建設, 都市の形成, 女性の権利と教育【思想・文化史】

①では、他のアジア諸国と同様、西欧からの働きかけにより「開国」し、近代化を押し進める日本像が描かれている。これまでの韓国歴史教科書の近代の流れは次の通りであった。西欧列強による帝国主義的な動き、即ち、ウエスタン・インパクトにより近代が始まり、1875年の江華島事件により不平等条約を結ばされた。朝鮮および大韓帝国は近代化の努力を続けるものの、1905年に第二次日韓協約で外交権を日本に奪われ、1910年の韓国併合による植民地支配により、36年間にわたる日本の加害と朝鮮の被害・抵抗の叙述である<sup>14)</sup>。要約すると、「ウエスタン・インパクト→日本の侵略・加害→朝鮮の被害・抵抗」の流れである。これに対して、今回の『東アジア史』の叙述では変化が見られる。まず、日本の近代化がどのようなものであったのかが、小単元「近代的改革の推進」の本文において岩倉使節団の説明と写真が掲載されている。ここでは「アジアで近代化に成功した国、日本」という頁もある<sup>15)</sup>。次に、【東アジアの人々】というコラムでは日中韓で改革を推進した人物が一人ずつ紹介されているのであるが、中国の李鴻章、韓国の開化派であった金弘集とともに、日本では伊藤博文が挙げられている。従来、伊藤博文は朝鮮侵略の元凶として韓国併合を押し進めた側面から韓国史の教科書に叙述されてはいた<sup>16)</sup>。しかし、近代化を推進した日本での立場を叙述したものは、韓国の歴史教科書において初めてのことである。さらに、中単元ごと

におかれている【さらに調べてみよう】という探究学習の内容は「各国の憲法比較」として、大日本帝国憲法(1889)、大韓帝国国制(1899)、欽定憲法大綱(中国憲法初案1908)の第1条から第3条を比較できるようになっている。紹介したこれらの叙述は、最後は朝鮮半島への侵略と結びつけるなど、単に日本の近代化を褒めたたえるという内容ではないが、近代化という視点で日本の先進的な側面を評価しているのは興味深いことである。

②は、主に日本の侵略とその展開過程および被害が描かれている。その中で、目を引くのが【話の中へ】というコラムでの「北海道という名前の由来とアイヌ族」という叙述である。ここでは、アイヌ族は北海道とサハリンに住む少数民族であり、ある探検家が「アイヌの土地」という意味で北海道という地名を付けたこと。日本が北海道を支配しアイヌが正式名称となるが、外見や風習が日本人と異なり、現在も2万人程度が住んでいることが述べられている。この叙述は、日本の「国内」侵略の一端としてアイヌ民族の話を叙述している反面、日本の中の多文化を知らせるものとしても読むことができる。また、②では、日本の侵略による被害が描かれているのであるが、その中には日本民衆の受けた被害も含まれている。日本の侵略が日本民衆に与えた苦痛として、日中戦争の長期化に伴う国家総動員法の経済的統制、政治的・思想的弾圧の深化、天皇への忠誠強調。そして、死亡

者 200 万人のうち民間人被害が 65 万名、米軍による都市破壊と民間人犠牲者が続出し、1945 年 8 月の広島長崎の投下による民間人の犠牲が叙述されている。文章横には、広島原子爆弾投下の写真と、広島では 20 万人以上、長崎では 10 万人近い被害が出たことがキャプションで紹介されている。また、中単元終わりの【主題探究】では、各国の戦争被害を示す中で「東京大空襲当時、火に包まれる東京」という写真を掲載している。主に 1937 年以降の話であるが、こうした原子爆弾も含めた日本民衆の被害の叙述も、これまでほとんど見られなかったものである<sup>17)</sup>。

③は、日本の侵略に対する抵抗を叙述している。ここでは中国や韓国の民族運動が描かれており、日本についての叙述は少ない。

④は、日本の侵略に対する、反戦・反植民地活動を描いている。ここでも、日露戦争中に反戦論を唱え、朝鮮半島の植民地化を批判した人物として、内村鑑三が本文で顔写真とともに紹介されている。また、【歴史の現場】というコラムでは「国会で反戦演説をする斎藤隆夫」が、【東アジアの人々】では日本帝国主義に立ち向かった日本人として金子文子と布施辰治が叙述されている。ただし、ここでの連帯叙述は、社会的不平等の解消および無政府主義者が主となっており、近年、朝鮮半島に理解を示した人物としてよく日本で紹介されている柳宗悦<sup>18)</sup> や浅川巧などの叙述はない。

⑤については、【東アジアの人々】において夏

目漱石が文化発展の先覚者の一人として叙述され、【主題探究】では日本の小学校の授業場面が写真で示されている。

以上のように、近代の内容においては③の民族運動を叙述した部分を除くと、日本の近代化、日本民衆の被害、日本人・中国人・朝鮮人の連帯など、それまでの加害だけでない日本の姿が多様に描かれているのがわかる。その中でも、特に大きな変化が見られるのは④での連帯の叙述である。次節では、この「平和へ向かう努力」の叙述分析および教授内容についての検討を行なう。

### 3. 「平和へ向かう努力」の叙述分析

#### (1) 両教科書の比較

教育課程において、中単元「平和へ向かう努力」は、反戦、反植民地運動を国際連帯という内容から扱うことが述べられている。国際連帯の中には、日本での日本人による活動と植民地での反戦・反植民地運動も含まれており、国家や民族を超えて、国際連帯を行なった団体と人物を学び、時代的意味を考えるとされている<sup>19)</sup>。それでは、具体的に日本のことをどのように教えるのか。表 3 は中単元「平和へ向かう努力」での、日本に関する内容を両教科書のコラムなどで比較したものである。ここで主文ではなくコラムで比較を行なうのは、両教科書ともコラムにより教科書叙述の大部分を構成しているからである<sup>20)</sup>。

表 3：「平和へ向かう努力」の日本関連叙述内容の比較

	天才教育版 (分量 6 頁)	教学社版 (分量 9 頁)
	中単元名：平和へ向かう努力	中単元名：反侵略抵抗運動
平和へ向かう努力	(1) 安重根の東洋平和論 (2) 朝鮮義勇軍最後の副隊長金学鉄 (3) 国会で反戦演説をする斎藤隆夫 (4) 日本帝国主義に向き合った日本人 金子文子・朴烈／布施辰治 (5) 主題学習 ① 亜州和親会の活動 ② 朝鮮義勇軍の活動 ③ 韓国光復軍の宣言文	(1) ~ (7)：「民族主義と民族運動」の関連内容 (8) 集中探究活動 ① 朝鮮義勇軍隊員が明らかにした韓中連帯の意味 ② 戦陣訓を活用した反戦同盟の教育史料。(写真：日本人反戦同盟 1940.5. 結成、資料：在華日本人反戦同盟延安支部の教育史料) ③ 反戦同盟の活動方向 (資料：在華日本人反戦同盟華北連合会要綱 1942.7.13)

※下線強調は筆者による。

表3を見ればわかるように、教学社版の中単元「反侵略抵抗運動」においては、「民族主義と民族運動」は7つの項目で構成されているが、(8)の集中探究活動において「平和へ向かう努力」の内容が含まれている。中でも下線を引いた②と③は日本人による反戦運動が紹介されている。日本人の中国における反戦同盟の活動である在華日本人反戦同盟延安支部の教育資料と華北連合会の要綱である。このように、教学社版ではこれら日本人による日本帝国主義への反戦運動は本文でもなく、コラムでもなく、生徒の探究活動で扱われている。これに対して、この日本人も含めた反戦・反帝運動を本文およびコラム部分で大きく扱っているのが天才教育版の「平和へ向かう努力」の中単元なのである。天才教育版では、安重根の東洋平和論や朝鮮義勇軍の金学鉄など朝鮮の独立運動家を扱いつつも、日本帝国主義に向き合った日本人として、関東大震災後に天皇暗殺を企てたとして大逆罪に問われた金子文子<sup>21)</sup>とそのパートナーの朝鮮人朴烈より、日本人と朝鮮人の連帯を扱っている。また、弁護士布施辰治は、日本人だけでなく朝鮮や台湾でも民衆のために活動し、大逆罪に問われた朴烈の弁護士を務めたことが叙述されている。そして、2005年に韓国政府から民族運動家を表彰する建国勲章を日本人で初めて受けたことを紹介している<sup>22)</sup>。

それでは、天才教育版だけにあるこのような「平和へ向かう努力」の内容はどのように教えられるのか。次節では、教師用指導書の分析を通じて、この「平和へ向かう努力」の教授内容を具体的に明らかにする。

## (2) 天才教育版の教師用指導書分析

天才教育版の教師用指導書において「平和へ向かう努力」の学習内容は、「反戦・反帝思想の形成」と「抗日のための国際連帯」の2時間に分かれている。反戦・反帝国思想を扱う1時間目の内容は次のとおりである。まず反戦・反帝

思想の登場と日露戦争での反戦思想を内村鑑三で説明する。次に、1907年に東京で結成された亜州和親会による日本人と中国人との連帯活動を扱った後、無政府主義の定義とその思想の広がり、日本人は金子文子、朝鮮人は無政府主義を独立運動の理念とした申采浩、中国では文学者の巴金という3名の思想家により具体的に説明している。

2時間目は日中韓で行われた国家間を超えた連帯活動を実際に扱っており、ここで詳細に説明する。本時の学習目標は次の3点である<sup>23)</sup>。(a) 東アジア3国が日本帝国主義に対して連帯した内容を理解することが出来る。(b) 各国間の連帯がどのような形態で進化したかを説明することができる。(c) 国際連帯に積極的に加わった団体、勢力を抽出することができる。このように、日本を含む東アジア3国が日本帝国主義に対して、いかなる団体・勢力がどのように連帯したかを学ぶことがこの授業の目標となっている。教科書叙述のとおり、日本帝国主義という国家とそれに抵抗した日本人を分けていることが注目されよう。だからこそ、指導上の留意点として、国際連帯の背景とともに「東アジアの国際的連帯が国家の枠組みを超えて起こったことをわかるように指導する」<sup>24)</sup>が挙げられているのである。ここでは、侵略した日本に対して侵略された側の中国・朝鮮半島という、それまでの国家間対立の枠組みではなく、帝国主義に対峙した団体や勢力で東アジアをとらえ、国家を超えた人間同士の枠組みへと変化させているのである。このような目標の下で考えられた展開例は、以下のとおりである。

表4の指導上の留意点にあるように、まず抗日のための国際的行動の展開を問う質問で動機づけを行ない、反戦・反帝国主義の意味と今日の学習内容の概略を示している。展開に入ると、(1)～(5)の内容で学習を進める。(1)(2)では、中国と韓国の連帯活動である。(1)は両国内で1919年3月1日、5月4日に起こった抗日運動

表 4：「抗日のための国際連帯」授業展開例

段階	教授・学習活動	授業資料および指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時学習の内容確認</li> <li>  - 反戦・反帝思想とは？</li> <li>  - 亜州和親会の活動内容は？</li> <li>  - 無政府主義者の活動内容は？</li> <li>・本時学習主題及び目標提示</li> </ul>	<p>単元開き：抗日のための国際的行動はどのような方向で展開したのか？という質問をして、授業に対する学生の関心を誘導する。</p>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 韓国と中国の連帯活動               <ul style="list-style-type: none"> <li>①背景：日本侵略に共同で直面した両国の処置</li> <li>②民族運動の展開過程における連帯活動                   <ul style="list-style-type: none"> <li>・3・1運動：在韓中国人の労働者参加</li> <li>・5・4運動：中国亡命独立運動家と留学生の参加</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>(2) 韓国と中国の抗日連帯               <ul style="list-style-type: none"> <li>①契機：日帝の中国侵略とこれに呼応する李奉昌・尹奉吉の義挙</li> <li>②中韓民族の抗日大同盟（1932）結成                   <ul style="list-style-type: none"> <li>・性格：大韓民国臨時政府と国民政府の秘密結社</li> <li>・目的：抗日連帯を通じて中国の失地回復、韓国の独立</li> </ul> </li> <li>③中国国民政府の臨時政府支援                   <ul style="list-style-type: none"> <li>・朝鮮義勇軍：金元鳳主導、中国国民政府の支援、一部は韓国光復軍に吸収</li> <li>・韓国光復軍：中国政府の支援により、日本に宣戦布告をして対日戦参加</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>(3) 韓国と日本の連帯               <ul style="list-style-type: none"> <li>①社会的不平等解消の連帯：韓国の衛平社（身分解放運動主導）と日本の水平社（部落民解放運動団体）の連帯</li> <li>②日本反帝同盟：在日韓国人中心、日本帝国主義打倒のための共同闘争強調、反帝新聞発行</li> </ul> </li> <li>(4) 中国と日本の連帯               <ul style="list-style-type: none"> <li>①中心地：日中戦争が展開された中国</li> <li>②反戦同盟：各地に支部設置，“兵舎の友人”刊行。日本軍の脱兵と投降呼びかけ、日本の状況伝播、さまざまな団体（日本人反戦同盟回復連合会組織）</li> </ul> </li> <li>(5) 無政府主義者の活動：東方無政府主義者連盟（東アジアの国際連帯）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・韓中連帯が展開された背景を説明する（講義）。</li> <li>・韓国が中国と連帯を行う背景を理解するように（探究学習）</li> <li>・210頁‘金学鉄の話’を読んで感想および連帯の背景と目的を理解する。</li> <li>・金元鳳の朝鮮義勇隊の活動を説明する。</li> <li>・日本で展開される連帯活動を説明する。</li> <li>・日中連帯の特長は日本軍捕虜を中心に展開されたことを説明する。</li> </ul>
整理 および 評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小単元整理および形成評価</li> <li>・次時予告－社会進化論</li> </ul>	

【出典】アンビョンウ他『高等学校東アジア史教師用指導書』天才教育，2012，226頁。  
 ここでの韓国は、朝鮮半島全体を指している。

の内容である。(2)では、中国国内で行われた朝鮮人と中国の合同での抗日運動である。韓国  
 の臨時政府と中国国民党の結合および、中国国

内での朝鮮義勇軍の活動を指している。これに加えて、(3)(4)では日本と中国・朝鮮との連帯が学習内容となっている。(3)では、朝鮮人

と日本人の連帯である。この内容は2つに分けられる。1つは社会的不平等の解消として、朝鮮で白丁と言われ差別されていた衛平社と日本水平社との連帯である。2つ目は、先ほどの教科書分析でも紹介した朴烈などの日本在住のコリアンと金子文子などの日本人との連帯によって行われた反帝国主義の活動である。(4)は中国と日本人の連帯である。具体的には、日中戦争を行っていた中国での日本人と中国人の反戦同盟である。(5)は、無政府主義者の活動として東方無政府主義者連盟の活動を扱いながら、東アジアの国際連帯をまとめている。教師用指導書においても、こうした反戦・反帝運動が無政府主義者たちの連帯に偏っている印象は受けるものの<sup>23)</sup>、国家間を超えた人間同士のつながりを強調している点は特筆できる。

#### 4. おわりに

今回の『東アジア史』教科書における近代史の叙述では、従来の「ウエスタン・インパクト→日本の侵略・加害→朝鮮の被害・抵抗」から「ウエスタン・インパクト→日本の侵略・加害→朝鮮人・中国人・日本人の被害・抵抗→朝鮮人・中国人・日本人との連帯」へと大きな変化を見せた。日中韓の連帯事例が無政府主義者の活動だけであるものの、それまでの日本=加害という国家単位を超えて、個人単位でも歴史を見ようとする姿勢を強く押し出している。この科目

が、韓国史ではなく「東アジア史」という地域世界の歴史を叙述する点を考慮しても、近代日本に対する大きな認識変化が見られるのである。

このような、日本に関する叙述変化の背景には何があるのか。その大きな理由として、「東アジア史」を取り巻く人物の性向を挙げることができよう。2007年に東アジア史を立案した教育人的資源部<sup>24)</sup>の中心人物や本稿でも紹介した『東アジア史』の執筆陣の中には、日本に留学したり、日中韓の歴史共同研究に参加したりした者が多かった。この事実が、近代日本を日本史側から、世界史的な視野から、多面的に見る叙述につながったと考えられる。これには、1982年の教科書問題に端を発した1990年代からの官・民による日韓共同歴史研究、教育研究の持続的な交流の影響もある。またこれ以外にも、1997年IMF通貨危機以降の経済発展に伴う精神的なゆとりが韓国社会の成熟をうながし、日本での韓流ブームも相まって、それまでの日本に対する視線に変化をもたらし、自国史を相対化する契機となっていることも指摘できよう<sup>25)</sup>。

今後は教科書を用いて行われる授業実践の分析を通じて、教師・生徒の東アジアおよび日本認識を明らかにする必要がある。

#### 付記

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号24531177A）による研究成果の一部である。

#### 註

- 1) 権五鉉「韓国社会科教育課程の改訂と歴史教育の改革 - 歴史科目の独立と「東アジア史」の新設 -」『社会科研究』69号, 2008。
- 2) 國分麻里「韓国歴史教育における東アジア的市民像」『市民教育への改革』谷川彰英監修, 江口勇治・伊藤純郎・井田仁康・唐木清志編著, 2010。
- 3) 『歴史認識の共有を目指す「東アジア史」の教材作成のための基礎研究』研究代表者君島和彦, 東京学芸大学平成20年度広域科学教科教育学研究経費報告書, 2009。
- 4) 本稿では、教育課程を指す場合は「東アジア史」、教科書を指す場合は『東アジア史』と記す。
- 5) シンジュベク「『韓国史』教科書における東アジアの歴史と歴史教育 - 韓国近現代史を中心に -」『韓日関係史研究』40号, 2011。
- 6) 経緯は次の本に詳しい。君島和彦編『歴史教育から「社会科」へ - 現場からの問い -』, 東京堂出版, 2011。
- 7) 東アジア史教員研修課程は2008年より東北

- 亜歴史財団より運営されており、東アジア史教育のための理論中心の基礎知識習得を目的としている。2008年はソウルで3回117名、2009年はソウル・地方で12回442名、2010年はソウル・地方で6回209名、2011年ソウル・地方で3回120名の高校歴史教師が参加している。また、2011年2月11日には10回1000名の講習を行い、東アジア史教育課程に含まれる内容要素の解説及び関連内容を学んでいる。さらに、2010年からは現場研修課程として、沖縄(2010)で「琉球/沖縄から見る東アジア」、北海道(2011)で「北海道で出会う東アジア」というテーマで各25名、3日～5日の研修も行っている。東北亜歴史財団「『東アジア史』教員研修事業現況」資料より。
- 8) 例えば、通史で書かれている2002年版『中学校国史教科書』(教育人的資源部)の各時代の叙述分量は、三国統一33頁、統一新羅19頁、高麗時代34頁、朝鮮時代59頁、現代35頁であるのに対して、近代は105頁あった。近代の内容も、大単元名が「開化と自主運動」「主権守護運動の展開」「民族の独立運動」であり、日本の侵略と朝鮮の独立運動により構成されている。ちなみに、韓国で自国の歴史を表わす国史が韓国史という名称に変わったのは、2007年の教育課程を契機としている。
  - 9) 朝日新聞(日本)と東亜日報社(韓国)が2010年に行った共同世論調査において、「併合」や植民地支配への日本の謝罪を十分だと答えた日本人は55%に対して韓国は1%、植民地支配の被害者への補償の再検討については、必要あると答えた日本人は30%だったのに対して、韓国人は89%であった。『朝日新聞』2010年6月10日付。
  - 10) 「東アジア史」『高等学校教育課程歴史』教育科学技術部、2007。
  - 11) 「東アジア史を学ぶ」『高等学校東アジア史』天才教育、2012。
  - 12) 総頁数は、天才教育版が286頁、教学社版が256頁であり、天才教育版が30頁ほど多い。値段は天才教育版7,500ウオン、教学社版4,210ウオンであり、天才教育版が2倍近く高い。
  - 13) 教学社版の執筆者に日韓歴史共同研究委員の関係者が多いことについては、教科書の「はじめに」部分にその成果を反映したことが叙述されている。ただ、ここでは政府間の歴史対話だけでなく、民間次元の日韓あるいは日中韓の歴史対話の成果も反映したことが書かれている。「初めの言葉」『高等学校東アジア史』教学社、2012。
  - 14) このような叙述の流れは、近現代の歴史に特化した1997年版教育課程の『韓国近現代の歴史』教科書類により顕著に表れている。
  - 15) ここでは日本の近代化の説明だけでなく、急速な近代化を危惧するあるフランス人の話、アジア諸国への差別と蔑視の風潮を醸成、周辺国を植民地化して侵略することを正当化する論理が形成された話が掲載されている。単なる日本の近代化を紹介する話ではなく、それがどのように朝鮮を含めたアジア侵略につながったかを叙述している。
  - 16) 例えば、次のような叙述である。「(統監府)初代統監として、先頭を切って我が国の侵略を推し進めた伊藤博文が…」『中学校国史』教育人的資源部、2002、236頁。
  - 17) 東アジア史と同様に高校選択科目である世界史の教科書においては、2012年より日本の戦争被害を表わすものとして、広島で投下された原子爆弾やキノコ雲の写真が掲載されている。ただし、原子爆弾の叙述は第二次世界大戦での新武器類と大量虐殺を写真で紹介した頁にあり、キノコ雲の写真も第二次世界大戦の終了を示す頁にあることから、東アジア史の叙述趣旨とは異なっていることがわかる。
  - 18) 例えば、柳宗悦に関しては、中学校社会科学歴史的分野で大きなシェアを持つ東京書籍

が2006年版教科書から「インターナショナルリスト柳宗悦」として、アイヌや沖縄および朝鮮文化の尊重を説いた面をコラムで大きく取り上げている。五味文彦ほか48名『新しい歴史』, 東京書籍, 2012, 191頁。

- 19) 「東アジア史」『高等学校教育課程解説』教育科学技術部, 265頁。  
 20) 天才教育版および教学社版の中単元の叙述構成は、以下のとおりである。どちらも(1)

は本文内容を指しているが、(2)以下はコラム的な内容で構成していることがわかる。人物学習やテーマ学習など、種類がバラエティに富むのは天才教育版である。加えて、探究活動や遂行評価など、活動的な内容が多いのも目につく。日本以上に韓国は歴史的思考力の育成も重視しており、教科書もそのような学生の活動を助ける内容が配置されている。

天才教育版	教学社版
(1) 中単元開き 【本文】	(1) 中単元の導入 【本文】
(2) その時世界は (3) さらに理解する (4) 歴史の現場 (5) 話の中へ (6) 特集 (7) 東アジアの人々 (8) 主題探究	(2) 開かれた資料, 開かれた考え (3) 探究活動 以下, (2) ~ (3) の繰り返し
(9) 中単元のまとめ ①大単元一目でわかる ②要点の整理 ③大単元の遂行評価	(4) 中単元のまとめ ①要点の再度確認 ②自ら整理 ③遂行活動まとめ

※筆者作成。

- 21) 金子文子については、次の本が詳しい。山田昭次『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』影書房, 1996。  
 22) 布施辰治と朝鮮半島とのかかわりについては、次の文章を参照のこと。二谷貞夫「関東大震災で韓国人を助けた布施辰治」『日韓で考える歴史教育-教科書比較とともに』研究代表二谷貞夫, 編集責任梅野正信, 明石書店, 2010。  
 23) アンビョンウ他『高等学校東アジア史教師用指導書』天才教育, 2012, 226頁。  
 24) 同上。  
 25) こうした連帯事例として無政府主義者の活動が重視される理由として、筆者は次の2つの要因があると考え。1つ目は、2000年代に入りこうした無政府主義者たちの研究文献が発行されており、それら新しい研究成果を取り入れやすくなったということである。天才教育版指導書の参考文献を見ると、イホリョン『韓国のアナーキズム』(知識産業社2001), チョセヒョン『東アジアアナーキ

ズム, その反逆の歴史』(本世界2008), 同『東アジアアナーキストの国際交流と連帯』(創批2010)など、すべて2000年代に出版されたものである。2つ目は、死と隣り合わせの危険な行動である反帝国・反植民地活動により日本という国家に対峙したという、個人の実践的な行動を積極的に評価したということである。日本で評価されている人物、例えば朝鮮王朝の景福宮にある光化門の取り壊しに反対した柳宗悦、朝鮮での植林に力を入れるだけでなく朝鮮の人々に理解を示した浅川巧などは『東アジア史』に叙述されていない。弁護士の布施辰治は叙述されているが、彼は無政府主義者の金子文子と行動を共にした朴烈を弁護した関係者とも言える。無政府主義者たちによる国家への直接的な抵抗と比較して、柳宗悦や浅川巧など人道主義的な人物では直接的な影響力は未知数であり、連帯事例としては弱いと判断されたのだろうか。またはこれらの人物評価の日韓の差異からくるものだ

ろうか。執筆者への聞き取りや文献調査から、さらに明らかにすべき点である。

- 26) 日本の文部科学省に当たる。現在は教育科学技術部という名称である。
- 27) 2007年版教育課程で見られた韓国における自国史の相対化については、前掲の國分麻里「韓国歴史教育における東アジア的市民像」の126～127頁も参照のこと。